

学びをひろげる

(第32回)

※ ○は、自分以外の参加した人の数です

まる (わたしと○人の会)

日時 2020年1月18日(土) (1時45分～5時)
場所 城東区民センター4階 小会議室
〒536-8510 大阪市城東区中央3-5-45 TEL06-6932-2000
参加費 500円(会場費・運営費等) ※学生は、無料です。

一人で拓げられない学びを○(まる)人が集まり、多様な人たち(年齢、国籍、職種など様々な人たち)との出会い・対話を通して自分の学びを拓げ、授業づくり・教材づくりをしませんか。もう一度、教育・授業のあり方をていねいに見つめ語り合しましょう。

前回 第31回の内容

「聴くということ」に寄せて—私の場合—

2019年9月14日 関山域子さん提案(小学校の心の相談員)

関山さんは、「私が人の話を聞けていないなんて自覚を持ったことは、2000年までは全くなかった。あることが起こり、直面して、大わらわになって、私にとっての大地が鳴動した。そこで初めて、自分はきいていなかった～、心を砕いてこなかった～、と。以来、自分の生き方を問うてきた。そんな過程を経て18年、『聴くということ』の重要性を実感させてもらっている。」といわれる。「心の相談員」という立場で、子どもたちや保護者や教員たちと向き合うときも、或いは日常のなかで人と関わり合うときも、決して「聞いてあげる」という上下関係ではなく、対等の関係で相手の言葉を受け取り、また自分の言葉を届けようとする、それを人との関わり方の作法・流儀とされているように思えました。

参加者から、個人史や家族のこと、今まで人前で話したことがないことなどが語られたのも、関山さんが生み出す「聞き合う関係・語り合う関係」という舞台、雰囲気、空気が引き出したのかもしれない。

松井さんはこんな感想を寄せてくれました—私が教員になりたての頃、先輩から聞いた言葉を思い出していた。「誰もが笑顔で登校するのではない。ランドセルいっぱい悲しみを詰めて登校する子もいるのだ。」という言葉だ。そしてさらに「ランドセルに入りきる悲しみなら、まだましなのかもしれない。」とすら思ってしまった。それほど重い現実がいくつか紹介された。参加者の中からも重い話も出てきた。私を含めて誰かが何とかできたのか、それとも誰も何ともできなかったのか。誰もが「愛してほしいだけ」なのかもしれない。「自分を認めてほしいだけ」なのかもしれない。

大昔なら人間を苦しめる一番の敵は「自然」だったのかもしれない。でも、人間にとって自然が脅威だったころは、逆に人間どうしは結束が強かったような気がする。現在も自然が脅威であるということには変わりはないが、少なくとも今の日本では、人間を苦しめているのは一番に「人間」のような気がする。そして、大人と子どもの関係では、子どもは圧倒的に苦しめられる側になる場合が多い。

話を聴くことで、その人の心の整理ができれば、もしかしたら少しは何とかなるかもしれない、という営みが「カウンセリング」なのだろうな、と思う。誰もがお互いに相手の思いを聞く(聴く)機会をもっと増やしたら、意図的に相手の言葉に耳を傾け合えたら、お互いが感じている苦しみは少しは軽くなるはず。それができないのは、例えば教育現場の余裕のなさ、例えば教育現場の強烈な学力主義、・・・等々といろいろ考えられるが、取りあえず、年寄りの子守りはそれをしやすいはず、と自分の行動に反映させようと思う。



京阪電鉄 野江駅 徒歩約8分

地下鉄 長堀鶴見緑地線・今里筋線「蒲生四丁目駅」1番・7番出口 徒歩約5分



今回 第32回は

JICA インクルーシブ教育研修 ワークショップ「障害者がみんなといっしょに学び合うことについて」

提案 松森俊尚(“学びの会”スタッフ)

2015年から毎年上記のワークショップを続けてきました。今年度も12か国から15名の研修生が来日して、取り組みました。人種も民族も、自然や歴史、文化もちがう、現在の経済や政情も全くちがう国の人たちが、障害者の教育について考え、ディスカッションする場合は、私にとっていつも大きな学びの機会になっています。当日のビデオを視聴しながら、インクルーシブ教育の意味や現状について、世界の中で日本の教育はどう映っているのかなど、参加者で交流したいと思います。

連絡先 松森 (☎090・1960・3469 ✉matumori@crux.ocn.ne.jp)

★次回第33回研究会は、2020年4月11日(土)午後1時45分～ 城東区民センター4階小会議室にて★